

やどかりの里からのメッセージ

互いのいのちを大切に作る社会に向けて

相模原の障害者施設での殺傷事件から

2016年7月26日未明におこった神奈川県相模原市の障害者支援施設「津久井やまゆり園」での殺傷事件で、一瞬にしていのちを奪われた19人の方々に心より哀悼の意を捧げます。そして、身体だけではなく、心に深い傷を負った方々の回復を心より願っています。

障害の重い人たちを狙って殺傷したこの事件は、その容疑者が元施設職員であったことも含め、私たちは戦慄し、耳を疑い、怒りを覚えました。さらに、容疑者の「障害者がいなくなればいい」という供述に、障害のある人、家族、関係者は深く傷つきました。

そして、この事件の真相が明らかにならないまま、容疑者の措置入院歴が先に取り上げられ、障害者施設殺傷事件の再発防止策を議論するため、厚生労働省に検討チームが設置されました。措置入院後の退院の判断や退院後の対応が問われ、今秋をめどに提言をまとめると報道されています。この拙速な見直しの動きは社会防衛的な考えが強化されるものとして容認されるものではありません。

治安維持のための社会防衛的な考えは、精神障害のある人や家族を傷つけ、精神障害のある人への差別偏見を助長します。障害者権利条約では、地域で暮らす権利、必要な手助けを受ける権利を確認しているにもかかわらず、歴史の針を戻していく行いであると言えます。更には、この事件の本質を曖昧にし、精神障害者施策の問題に矮小化し、真の問題解決から目を背けることになると危惧します。

今求められているのは、なぜこの事件が起こってしまったのか、まずはその真相の解明なのではないでしょうか。容疑者がなぜ事件を起こすに至ったのか、その背景にあることに向き合うことではないでしょうか。また、被害にあった人たちがなぜ匿名報道のままなのか、障害のある人たちが置かれている状況を映し出しているように感じざるを得ません。

この事件は、現代社会にさまざまな警鐘を鳴らしています。「障害者がいなくなればいい」という考えは、この容疑者の特異なものと言い切れるのでしょうか。昨年も公職にある人が「障害者が生まれる前に分かればいい、お金がかかって大変だ」と発言し、発言を撤回する出来事がありました。この社会には、障害のある人、高齢者などにお金をかけるのは無駄といった考え方が根深く潜んでいるように思うのです。それは、私たちの生きる社会がさまざまなひずみを抱え、生きづらさを感じる人が増え、そのはげ口が「差別」として表れているようにも思われます。ある精神障害のある人が「病気の苦しさよりも孤立していた時のほうが苦しかった」と語ってくれたことがあります。不安定就労で経済的不安を抱え、孤立して生きる人が増えてきている表れなのかもしれません。

やどかりの里は、精神障害のある人や家族の体験を大切にしてきました。その体験から、仲間を得ることが回復の第一歩であること、生きていてよかったと実感できる仕事や活動に参画し、人とつながって生きることが大事なのだと考えてきました。

今回の事件は、私たちの生きる社会が抱えるさまざまな課題を浮き彫りにしているように思います。今こそ、1人1人を大切に、互いの体験や知恵を尊重しながら、共に生きられる社会が求められています。やどかりの里は、この事件に直面してひるむのではなく、全国の仲間と力を合わせ、誰もが生きていてよかったと実感できる社会の実現に向けて努力していきます。

2016年8月18日

公益社団法人やどかりの里